



## 新型コロナウイルスと 障害者の人権・発達保障

特集にあたって

河合隆平

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、人類史的危機といえるが、とりわけ障害者をはじめ社会的弱者とされる人びとの命を危機にさらした。それは、この国の医療・福祉政策の脆弱さに起因するものであり、障害者、その人たちをケアする人、それを支援する人たちの存在を軽んじ、その切実な声に耳を傾けようとしない「弱くもろい社会」が招いた困難であり惨事である。

2023年5月、新型コロナウイルス感染症は、感染症法上の位置づけが2類相当から5類感染症へと引き下げられ、感染対策が大幅に緩和されたが、障害者やその家族は今なお命と健康への不安を感じながら生活を送っており、支援の現場でも緊張や不安が続いている。しかし、対策や政策に対する反省や検証もないまま政府によって「アフター・コロナ」が強調されることで、障害者の困難や問題はますます置き去りにされていないか。

本誌もその都度、コロナ禍の障害者問題をめぐる動向や議論を取り上げてきたが、あらためて新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって障害者がいかなる困難に直面したのか、そしてそれらが障害者の人権・発達保障に突きつけた課題を議論すべく本特集を企画した。

木全論文では、関連論考からコロナ・パンデミックの実態と明るみになった課題を整理し、ある社会福祉法人のコロナ禍の経験を聴き取りながら、ケア労働の重要性をおさえたうえで、ソーシャルワークの議論のうえに「民主主義」と「人権」という価値に立脚した「応答責任」を果たしていく「自治」の積み重ねを呼びかける。

三木論文は、感染拡大下で排他的空気や強権的統制が呼び込まれるなかで学校の全国一斉臨時休業が要請されたとしたうえで、一斉休校中の子どもや家族、教職員の実態や学校再開の現状から、子どもたちに「人間的共感関係」に支えられた生存を保障する学校教育に光を当てる。

口分田論文は、重症心身障害者施設におけるクラスターの実態と緊迫した対応の実際を振り返り、制限された環境にあっても入所者一人ひとりに応じた日常のケアの重要性を再確認し、病棟における家族面会の取り組みにも触れながら、「人と人が当たり前につながりながら、生きていくという当たり前の権利」の保障を訴える。

コロナ禍がもたらす影響を明らかにするには、長期にわたる検証が必要である。そのためにも、障害者が直面し今なお継続する困難を具体的に記録しておかなければならない。後半では、福祉事業所の生産活動・利用者工賃への影響（松本）、一斉休業中の特別支援学校の対応（阪倉）、コロナ対策の最前線である保健所の現状（小松）を報告いただいた。手記として、保育園園長であり障害者の親としての経験（遠藤）、障害当事者としての感染と闘病の経験（高橋）を寄せていただいた。

本特集をもとに、いまだ明らかにされていないコロナ禍の障害者の困難や権利侵害の実態、実践現場の苦悩や経験を掘り起こし、すべての人の命と健康を守り、人権・発達保障の公的基盤と社会的条件を厚くするための課題について議論が展開されることを期待する。

（かわい りゅうへい 東京都立大学）